私の願い

海南市立下津第一中学校　２年　岩本　ひより

私には、世の中に向けて、一つの願いがある。

私の母と妹は、「聴覚障がい」を持っている。だから、普段から、聞こえを補助するために補聴器を使っている。しかし、何を言っているのかを相手に聞き返したり、何を言ったのかを私に聞いてきたりする。

聴覚障がいを持っているというだけ、自分とは違うというだけで差別する人がいる。同じ人間なのに、どうして差別をするのだろうか。

これは、実際に起こった出来事だ。ある男性が補聴器をつけて自転車に乗っていると、警察官に呼び止められ、「イヤホンを外しなさい。」と言われた。男性は警察官に補聴器の説明をしても、「イヤホンだと不安がる人がたくさん出てくるから、外すか、自転車に乗らないか、どちらかにしようね。」と返されたらしい。仕方なく補聴器を外した男性は、無事に自宅へ帰ることができた。だが、もし車や自転車の音に気付かなかったら、それが原因の事故が起こったかもしれない。

イヤホンをつけて自転車に乗ってはいけない理由は、車のクラクションなど周囲の音が聞こえなくなり、安全な通行ができなくなるからである。だが、補聴器は耳の聞こえを助けるものだ。耳の不自由な人が補聴器を外してしまうと、周囲の音が聞こえづらくなり、事故が起きると危険性が高まる。

このような出来事は、他の地域でも起こっているようだ。他にも、「職場で上司に外せと言われた。」「電車内で外せと注意された。」ということも起こっている。そして、これらの出来事に対してネット上では「耳が聞こえにくいだけでしょう？」「聞こえなくてもなんとかなるんじゃない？」といった意見も投稿されている。色やデザインの洗練された補聴器を見た人は、「ブルートゥースのイヤホンか何かですか？」と反応するなど、世の中に補聴器が浸透していないという現実がある。

私はこれらのことを聞いて、私の妹は補聴器を付けていることを、周りの友達や先生はみんな知ってくれているけれど、社会に目を向けると認知度が低いのだなと思った。

妹にこれについてどう思うかを聞くと、「補聴器は私たちが生きていくためにあるものだから。イヤホンじゃない。つけていなければ聞こえにくいし、事故を起こすかもしれない。」と答えてくれた。母も、「補聴器は自分の体の一部のようなもの。」と言った。

和歌山県には、全国でも珍しい聴覚障がいのある人だけが通う「ろう学校」がある。妹はその学校に週に一度通っている。その交流を通じて同じ障がいを持った友達ができた。母はこのことがきっかけの一つとなって、手話教室に通い始めた。

補聴器を付けても聞こえない「ろう」の人たちは、手話で会話をしている。手話は、身振りや手振りで表現する方法だ。私は、母について行って二度ほど地域の手話教室に参加したことがある。そこで手話を習っている人たちは、楽しそうだった。それに、耳が聞こえないということをポジティブに考え、生活していた。その人たちは私にも手話で話しかけてくれた。自分のたどたどしい手話が通じたことがうれしかったことを今でも鮮明に覚えている。

私は、このような家族の話や実体験があったから、障がいに関心を持つことができた。しかし、世の中はまだ全然知ってくれていない。聴覚障がい者だけでなく、どの障がい者も、自分のこと、障がいのことを理解してほしいとみんな願っている。たくさんの人に、

少しでも障がいのことを知ってほしい。

　これが私の、世の中へ向けての願いだ。